

○鈴木 秀夫 (医療法人社団緑風会 鈴木医院)

竹炭は以前は燃料としてもちいられていたが、ここ数年生活環境を整える一つの手段として用いられてきている。今回慢性あるいは急性の運動器痛あるいは流行性耳下腺炎などで来院した症例に竹炭を使用する機会を得たので報告する。

対象並びに方法 : 対象は平成9年1月より12月まで当院を受診し竹炭使用に関し同意の得られた患者104例である。対象疾患は、頸肩腕症候群6例、手関節炎6例、肩関節周囲炎3例、急性腰痛症22例、急性膝関節8例、慢性膝関節10例、急性足関節炎8例、痛風5例、慢性関節リュウマチ10例、打撲8例、流行性耳下腺炎14例、帯状疱疹後神経痛4例である。竹炭は1000度以上で焼かれ、クリスタル状になったものを使用し、疼痛部位に当てた。効果判定は、Visual Analogue Scale (VAS) を用いて竹炭使用後5分後、10分後に行った。またVASが、竹炭使用前に比し25%以下は著効、26~50%を有効51~75%をやや有効、76%以下を無効とし、総数に占める有効以上の割合を有効率とした。

結果 : 症例全体のVASは、前 7.5 ± 1.7 から5分 3.8 ± 2.1 ($p < 0.001$) 10分 2.8 ± 1.4 ($p < 0.001$) と経時的に有意に改善した。また各疾患群でも同様の有意な改善が認められた。10分までの有効率は、頸肩腕 (36%) 腰痛 (63%) 肩関節 (66%) 慢性関節リュウマチ (40%) 帯状疱疹 (60%) であり、その他の疾患はいずれも70%以上の有効率であった。

結論 : 竹炭の急性効果は、5分以内に発現し時間とともにその効果は増強した。慢性よりも急性、深部よりも浅部の痛みにより効果的であった。